

口絵3 (左)『琉歌愛誦三十三首<本冊>試案』と(右)『琉歌愛誦』(<本冊>下絵本)

(研究資料紹介) 芹沢銈介『琉歌愛誦 三十三首』と制作資料

濱田 淑子 本田 秋子

Items of interest from the works of Serizawa Keisuke
Ryuka Aishou Sanjusanshu (33 Favorite Poems from Okinawa) by Serizawa Keisuke:
With new materials related to the book

HAMADA Shukuko HONDA Akiko

キーワード：芹沢銈介 外村吉之介 琉歌愛誦

要旨

吾八書房は、外村吉之介編・解説『琉歌愛誦 三十三首<別冊付録>』と、芹沢銈介の型絵染による琉歌、装画、装幀の『琉歌愛誦 三十三首<本冊>』を1979年11月に刊行することを計画した。<別冊付録>は1980年7月に出版されたが、型絵染による<本冊>は刊行されることなく終わった。しかし芹沢銈介作の公開済の3冊の下絵資料と新出資料が残っている。新出資料によって、芹沢と外村が出版にむけて鋭意検討を重ねていた形跡が明らかになった。これらの資料を紹介して、最終的にどのような<本冊>が完成予定だったのかを検討した。

Abstract

In November 1979, the publisher Gohachi Shobo planned to publish two books: 33 Favorite Poems from Okinawa, a stencil-dyed picture book by Serizawa Keisuke, and an accompanying, explanatory volume by Tonomura Kichinosuke. Tonomura's explanatory volume was published in July 1980, but the main volume by Serizawa was never actually published. Here, we consider three of Serizawa's books, which have already been exhibited, and new materials related to this book. These new materials make it plain that Serizawa and Tonomura repeatedly consulted on publishing the main volume. We go on to explore what Serizawa envisioned for his ill-fated picture book.

はじめに

2014年9月10日～2015年6月17日の長期にわたり芹沢銈介生誕120年記念「デザイナー芹沢銈介の世界展」(朝日新聞社・東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館主催)が開催された。日本橋高島屋に始まり東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館(3/17～6/17)まで全国5カ所の会場を巡回した展覧会だった。その出品作の中に初公開となった個人蔵の『琉歌愛誦』折帖と『琉球秀歌三十三首』冊子があった。いずれも肉筆本である。

さらにもう1冊『琉球秀歌』折帖(帙の題箋は「琉球秀歌」だが、折帖題箋は「琉球秀歌三十三首」)があり、沖縄風俗の描写が秀逸な肉筆作品として、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館でしばしば展示公開された。これら3冊はいずれも完成作ではなく試作本と考えられる。

1980年7月、外村吉之介編・解説による『琉歌愛誦

三十三首<別冊付録>』(以下<別冊付録>と表記)が限定125部で吾八から刊行された¹(図10)。島袋盛敏が編集した『琉歌大観』(1972年)に集録された3,000首の中から外村が33首を選び、解説を加えた出版物だった。言語の発音の違い、意味の隔たり、習俗の違いからくる歌の心に迫る難しさを感じながらも出版したのは、「私共が敬愛して止まない琉球列島の人々の、心の調べに没入したい願い」からであると外村は「あとがき」に記している。

さらに、「奥付」にはこの本は別冊付録であり、「<本冊>文字・装幀・絵 型染 芹沢銈介 用紙 出雲斐伊川紙」とある。この記述は、本冊を別に作成し出版する予定であることを示している。しかし本冊が公刊されることはなかった。

上記の『琉歌愛誦』『琉球秀歌三十三首』『琉球秀歌』の

3冊は『琉歌愛誦 三十三首<本冊>』を型絵染で制作するための、段階を追っての試行の下絵であったと想像できる。

また、東京・蒲田の工房から芹沢銈介美術工芸館に運び込まれた資料の中に、芹沢長介前館長が整理した『琉歌愛誦 三十三首』の関連資料5点が見つかった。関連資料の中には編者・外村が装画に対する要望を指示書きしたものがあり、その指示に芹沢ができる限り応えようと苦心した形跡が見られた。今回の論考では、すでに公開されていた上記3冊と、その存在がすでに確認されていた琉歌の文字下絵1冊の計4点に加えて、新たに見つかった5点の関連資料を追加紹介する。そして、芹沢銈介と外村吉之介が最終的にどのような内容の『琉歌愛誦 三十三首<本冊>』(以下<本冊>と表記)を刊行しようとしていたのか、なぜ<本冊>刊行実現に至らなかったのかについても考察したい。

1 『琉歌愛誦 三十三首』制作の経緯

芹沢銈介は11年来の念願かなって1939年に初めて沖縄への旅に出た。日本民藝協会同人と一緒に旅だった。同人の中で3月28日に到着したのは柳 宗悦夫妻、濱田庄司、田中俊雄、柳悦孝、外村、芹沢は一船遅れて4月2日到着、河井寛次郎は二船遅れて4月8日に到着した。この旅の記録となる「日本民藝協会同人琉球日記」は、第一回(『月刊民藝第1巻2号』)から第八回(『月刊民藝第1巻9号』)まで連載され、同人それぞれの沖縄での行動がつぶさに記録された。第一回～六回までの丹念な日記(3/25～5/24)は外村吉之介が担当した。

芹沢は、弟子の岡村吉右衛門が4月15日に到着すると、二人で瀬名波染屋に通って連日仕事に精を出し、5月6日には紅型が数点仕上がり、次に筒描きの風呂敷類の仕事を始めた。5月19日には琉球新報に「紅型」と題する文章を執筆したこと、熱心にスケッチして歩いている様子は5月1日、2日、16日、27日の日記に記述されている。4月11日、5月21日には壺屋で濱田と陶器の絵付けをしたことも記録される。

一方、織物作家の外村は機織りする人々の所を回っているが、特に琉歌の口調と音に魅かれ「石なぐの石の…」や「うらむ比謝橋や…」「波のこえもとまれ」などの歌を取材し、4月22日には柳、河井、濱田と喜久山家に行き、老母から古格ある自作の歌数首をきいて心打たれ、琉球の民歌について話し合っている。さらに5月6日夜には蛇皮線を取り寄せてもらって、正午に出帆した河井のために一同で「だんじょ嘉例吉や」を歌っている。また、5月20日頃には、琉球新報に「琉球の芝居」の原稿が掲載され、5月23日には

別天閣で八重山の歌を聞く。有名な「わしの鳥の歌」「安里屋ゆんた」「とばるま節」「あんばるのめだがまゆんた」などである。「とばるま節」については「男女の交唱ことさらによく、胸に込み上げるような哀調がある。…美しい八重山の山野が眼前にちらついて、一同の憧憬は切々たるものとなった。いよいよ引き上げる日も迫った今日になってまだこんな素晴らしい発見があるとは、琉球は我等にとって無盡の宝庫に外ならない」と日記にその感動を記した²。

また、宿舎にあてられた泉崎の民家で夕食を終えるころになると、学務課長の島袋源七郎が三線(さんしん)を抱えて訪れて、外村、柳 悦孝、田中、岡村を前に並ばせて琉歌指南が行われたことを、後年、岡村が書いている³。

日本民藝協会同人の琉球熱はさらに高まり、1939年の大晦日に出発した柳、濱田、棟方志功、式場隆三郎、土門拳、坂本万七以下同人26名は1940年正月3日に那覇に到着した。外村は一船遅れて1月8日に到着したが、この旅に芹沢は不参加だった。この時の日記はたくみ工芸店の鈴木訓治が記している⁴。『月刊民藝第2巻3号』(1940年3月 日本民藝協会)の「琉球文化各論」はその折参加した同人が執筆しているが、その中で外村は「琉球の友へー琉球文藝復興を思ふ」と題する文章を書いた。友人の喜久山添采が沖縄口の発音を付けてくれたことに感謝しつつも⁵、沖縄では琉球文化の核心が置き去りにされていること、踊りの意識的な技巧が琉球のよさを殺していると嘆いている。そして最後に、「友よ、言挙げて琉歌を歌へ。五體をもて舞ひ踊れ。」と締めくくる。この文章には、わずか二度の短い滞在によって琉球文化の核心にじかに触れたという外村の自信がみなぎっている。

『工藝100号』(1939年10月 日本民藝協会)のテーマは琉球風物だった。原色版挿絵には、壺屋(新垣栄徳の窯)の素地に芹沢が赤絵の絵付けをした深皿や、古い型紙を用いて、紅型の手法を忠実に守り、瀬名波工房で染め上げた絹の帯地が取り上げられ、さらには芹沢作の沖縄地図を差し挟んでいる。

本文では、芹沢が「かたちき とぬいひち」を、外村が「琉球の民歌」と「琉球の織物について」を執筆した。民歌は民衆の生活の中から生まれ、民衆の中で深く親しまれ歌われている短歌だが、外村は、琉球滞在中に聞いた少数の歌の中から11首を選んで解説を加えた。その中の6首は、40年後の1980年に刊行された<別冊付録>にも再録された。さらに文章の冒頭で「とにかく今は一つのノートとして世に訴へ、他日更にこの研究を完うしたいと思ふ(筆者傍線)」と述べているから、外村は1939年の琉球滞在中の早い時期

から琉歌（民歌）に強い関心を抱き、将来この研究をまとめたいと願っていたことがわかる。

外村は1981年に刊行された『芹沢銈介全集第8巻』（以下、全集第8巻と表記）に、1939年の沖縄の旅を回想して「沖縄の芹沢銈介」という文章を書いた。そこに「誰もの唇に、沖縄の民歌があがるようになるのに日にちはかからなかった。」と書く。そして、滞在中は芹沢と外村は同室で枕をならべて寝、夜ごとさまざまな話をしたらしいが、二人とも沖縄の人々の背景に「何か説明しがたい玄妙なものが永年身に沁みていたにちがいない」と感じていた。さらに「滞留中、芹沢が絶えず写生を怠らなかった。他の者がただうかうかと場と時を見過ごしにしている間に、今日の人々がカメラを向けるように、多くの物を写し取って止まなかった」「それは芹沢の胸に焼きついたものが無数にあった証しであると思う。」と書く。さらに「芹沢の沖縄は、すべてが肌身に添うように沁々していた。彼はどの位深くその生涯に沖縄の賜をうけたか測り知れないと思う。そして同時に、沖縄は芹沢の仕事によってどんなに強く新鮮な生彩を加えたか、これもまた測り知れないと思う。」と結んだ⁶。これらの文章を読めば、沁々とした格調高い琉歌紹介の本を刊行する時には、「芹沢の型染による琉歌と沖縄風俗の装画を」と、外村が切望したことは容易に理解できる。

2 『琉歌愛誦三十三首＜本冊＞』の関連資料

すでに公開されたり存在が知られていた資料（個人蔵）

①『琉歌愛誦』（＜本冊＞下絵本）口絵3、図1

折本仕立て

30.0×29.8×2.5（たて×よこ×厚さ）

貼込み紙 26.3×21.5

肉筆絵34図 琉歌33首貼込み（琉歌は、三「だんじょ嘉例吉や」以降は④をコピーしたものを貼付け）

残された資料の中の、＜本冊＞下絵本の最終版と考えられる。

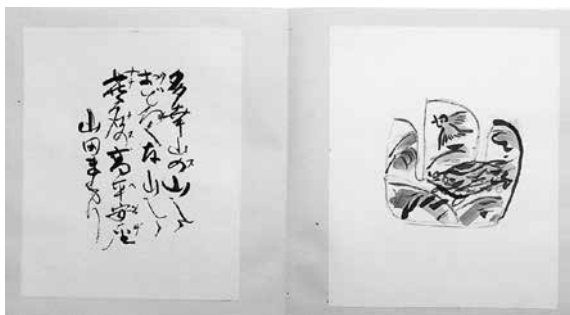


図1 『琉歌愛誦』

②『琉球秀歌』

帙題箋は琉球秀歌、折帖題箋は琉球秀歌三十三首
図2

折本仕立て 帙入り

帙 28.0×27.0×3.4

折本 27.8×26.5×2.5

肉筆絵26図 琉歌6首貼込み

『芹沢銈介装幀集』第8回頒布分付録の「作者だより」（1970）に「『沖縄秀歌』『妙好人源左』このところ滞っております。」と書いたところの下絵本と考えられる。帙の体裁は完成形である。

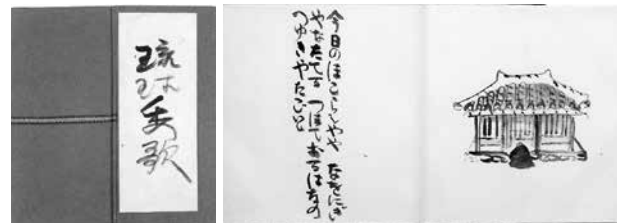


図2 『琉球秀歌』（折本）

③『琉球秀歌三十三首』図3

和綴じ

27.0×22.0×1.2

肉筆絵 14図貼込み、2図挟込み 琉歌10首貼込み

②と同じく『芹沢銈介装幀集』第8回頒布分付録の「作者だより」に1970）に「『沖縄秀歌』『妙好人源左』このところ滞っております。」と書いたところの下絵本と考えられる。本の体裁は完成形である。

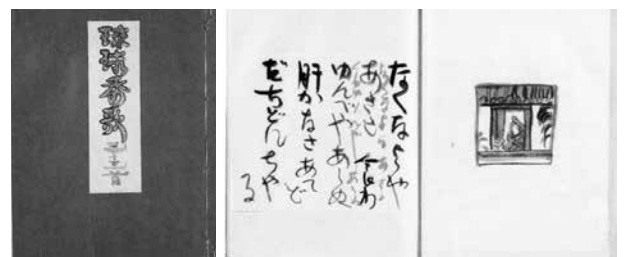


図3 『琉球秀歌三十三首』（和綴じ）

④「琉歌三十三首下絵 台紙貼り」図4

台紙 26.0×18.9

本紙 26.0×18.3

琉歌31首下絵 台紙貼込み（一、二の琉歌は欠、三「だんじょ嘉例吉や」は芹沢肉筆と外村肉筆の2種、四「いかり引きのせて…」は外村肉筆）

琉歌の内、一「石なごの石の」、二「今日のほこらしやや」はすでに型紙を彫り終わったため、琉歌下絵が欠になったと考えられる。①を見ると一、二はすでに型染文字

となっている。四は①と同じく外村筆で、四を除き、型彫りする直前の芹沢による最終的な琉歌下絵である。

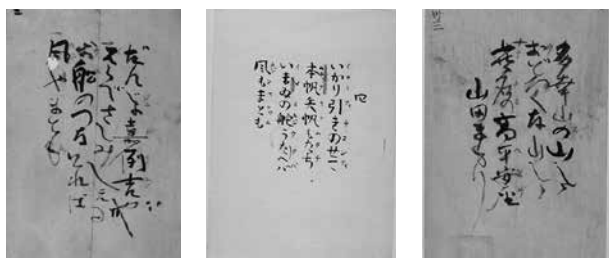


図4 『琉歌三十三首 下絵台紙貼り』

新たに見つかった資料

⑤『琉歌愛誦 三十三首<本冊>試案』口絵3、図5

折本仕立て 全35丁

27.1×22.0×2.8

33丁まで芹沢の肉筆絵や型絵染作品コピー貼付け、琉歌下絵のコピー貼付け 外村吉之介の指示書き挟込み 表紙に「此冊ハ絵と歌トノ組合ハセの試案」とある。琉歌の配列順番は④①と同じ。1頁目に挟込み別紙に外村は「造本 表紙 見返し 扉 目次 カット 右全部よろしくおねがい申します 外村は編者にして下さるようねがいます」と指示する。



図5 『琉歌愛誦 三十三首<本冊>試案』

⑥『琉歌愛誦 三十三首<本冊> 試案』図6

和本仕立て 全37丁

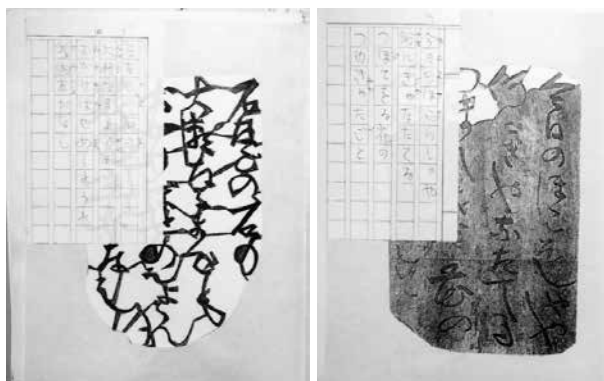
27.0×22.4×1.0

琉歌下絵コピー貼込み（「石なごの石の…」は彫り終わった型紙のコピー、「今日のほこらしや…」「いかり引きのせて…」は型彫り開始段階のコピー）

図は全集第8巻集録の「沖縄みやげ」（一）（二）（三）と「沖縄風物」を切り取って貼込み

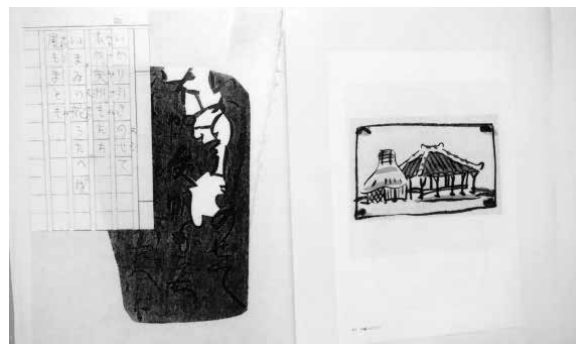
琉歌33首を鉛筆書きした原稿用紙挟込み 琉歌下絵に朱を入れて訂正を加えている。

琉歌の文字校正に主眼をおいた、全集第8巻刊行（1981年1月）準備期間中の試案。



石なごの石の（型紙コピー）

今日のほこらしやや（型彫り開始コピー）



いかり引きのせて（型彫り開始コピー）
全集8のp 97「沖縄みやげ」貼込み

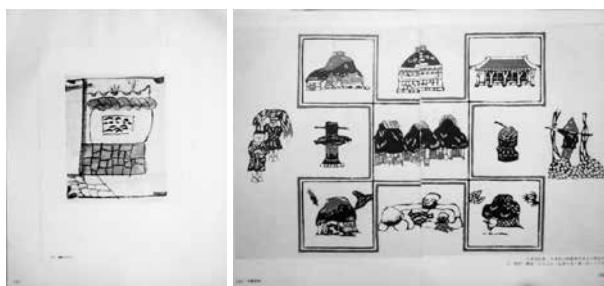
図6 『琉歌愛誦 三十三首<本冊>試案』

⑦『琉歌愛誦 三十三首<本冊>試案』図7

台紙 27.2×21.0

台紙78枚に全集第8巻集録の「沖縄みやげ」（一）（二）（三）と「沖縄風物」を切り取って9枚目まで貼込み 美濃紙肉筆絵9枚と下絵コピー 20枚挟込み

琉歌はないので、装画を検討するための全集第8巻刊行（1981年1月）準備期間中の試案。



全集8 p 28の「沖縄みやげ」貼込み

全集8 p 132、133「沖縄風物」貼込み

図7 『琉歌愛誦 三十三首<本冊>試案』

⑧「琉歌愛誦 造本資料」図8

帙、和綴じ本（四つ目綴じ）の見本 全35丁

帙 27.2×23.2×2.3（②と同じ造り）

和綴じ本 27.0×22.3×1.5（③と同じ造り、中味
は白紙）

②の帙、③の本の体裁と同じである。

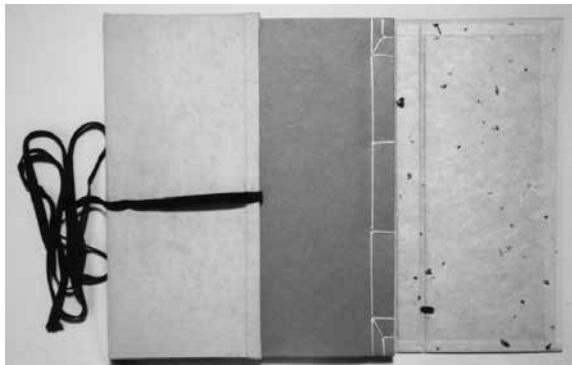


図8 『琉歌愛誦 三十三首』造本資料

⑨「琉歌愛誦 三十三首＜別冊付録＞校正」図9

封筒入り（1979年10月5日の消印）

印刷校正用紙に外村による装画の指示（鉛筆書き）あり

外村吉之介から芹沢銈介宛手紙同封

外村は＜別冊付録＞刊行目前の段階には、芹沢の＜本冊＞
同時刊行に積極的だったことがわかる。

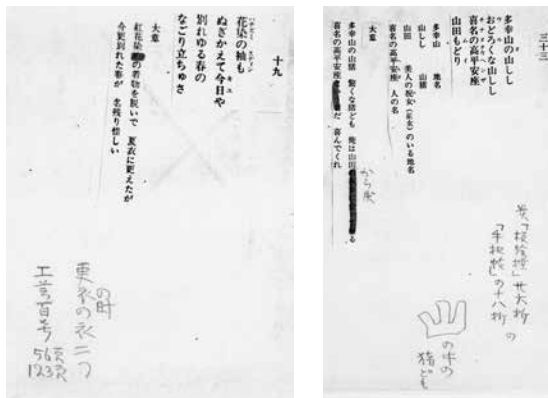


図9 『琉歌愛誦 三十三首＜別冊付録＞』校正

⑩外村吉之介 解説 編著『琉歌愛誦 三十三首＜別冊付録＞』図10

1980年7月 限定125部 吾八刊行

27.0×22.5×1.0

＜別冊付録＞刊行直前の1980年6月7日の外村から芹沢宛ハガキに、「カットは研究所の者に彫りなおさせると仰せられしように覚えているが」とある。これは、刊行された＜別冊付録＞のカットのことで、緋文化を支えたとされる「御絵図（みえず）」からデザインしたものを指していると思われる。カットは研究所の弟子

が彫り直したものなのだろうか、それとも元のままのものなのだろうか。いずれにしても＜別冊付録＞のカットは芹沢が担当した。



図10 外村吉之介 解説 編著『琉歌愛誦三十三首＜別冊付録＞』

3 関連資料が作られた年代

『芹沢銈介装幀集』第8回頒布分付録の「作者だより」(1970 吾八)に「『沖縄秀歌』『妙好人源左』このところ滞っております。」とある。外村吉之介からの申し出があって制作にとりかかった最初期の下絵本は関連資料②、③であり、芹沢が琉歌と装画を自由に組み合わせて1970年頃に制作したと考えられる。⑧の全35丁の和綴じ本と帙は、すでに準備を進めていた芹沢の意向（②③）を考慮した吾八書房が考えた出版予定の＜本冊＞の形であろう。

その後、＜本冊＞制作は停滞したままとなっていたが、1979年4月、外村から取り上げる琉歌33首を原稿用紙に記したものが芹沢に届く。そこには、『琉歌愛誦 三十三首』出版についての次のような吾八書房のメモが同封されていた。

「外村吉之介 琉歌愛誦 三十三首 出版予定

歌文・挿画、型彫 芹沢銈介

発行部数 150部（予定） 進行中決定すること

別冊 三十三首解説（活字組） 帙納め

頒価 10万～15万

発行予定 54年11月

費用 売価から逆算……」

それから半年経った1979年10月5日付の外村から芹沢宛ての手紙が遺っている。この手紙は⑨に同封されていた。先日お会いしていろいろと話ができて感謝していることを書いた後、「とりあえず 各首について愚案が浮かぶまゝに書いてみましたが、もしどれか採用していただければと思い あと、何かご質問により愚考を重ねます 三つ四つ書きこまないのは、貴案によりたいと思いますが、しかし何

でも仰せ下さい 今度貴『板絵控』や『手控帖』を返し見て、お仕事の深さ、勁さ、美しさに声を吞みました」とある。この文章から推測すると、⑨に挟み込まれた外村自筆の指示書きは、手紙にある「愚案が浮かぶまゝに書いてみましたが」に当たると思われる。⑤はその直後に⑨を参考に芹沢が作成して外村に送り、より詳しい指示書きが加えられた上で芹沢に返送されたものだろう。

琉歌型彫り状況

琉歌型彫り開始の形跡は関連資料④⑥①に見られる。

④は型彫直前の琉歌下絵とみられ、三十三首のうち、「一石なごの石の」と「二今日のほこらしや」は型彫り作業進行中のために欠けている。次に⑥であるが、⑥は装画案ページに全集第8巻（1981年1月 中央公論社）刊行準備中のページを切り取って貼り付けていることから、1980年秋頃の制作と考えられる。そして⑥の琉歌下絵の型彫り状況を見ると一は吊りのついたままの型紙、二は彫りかけ、「三いかり引きのせて」の型彫りも始めている（図6）。④と①の琉歌「三いかり引きのせて」に外村自筆コピーが貼りつけられているところからみて、⑥で琉歌校正をした直後に④が出来上がったと考えられる。さらに琉歌型彫り状況から、①はそれと近い時期に続けて制作されたのだろう。①は⑥よりも型紙制作が進み、一、二はすでに型染後の琉歌が貼られている（口絵③）。琉歌の配列が⑥④①と同じ⑤については型彫りが始まっていないので、より先の段階の試案といえる。

制作順を考えると、②③（1970年頃）、⑤（1979年10月以降）→⑥④（1980年秋頃）→①となる。

装画下絵制作状況

装画下絵に関わる資料は②③、⑤、⑦①である。しかし、型彫り開始の形跡はどの資料にも見当たらない。

- ・⑤の「伊野波の石こびれ」の装画（コピー）は②の下絵をコピーしたものが使われている（図11）。⑤は②の後に作られていることになる。
- ・⑦に挟込み下絵（コピー図12）の中には、③の「あちゃからの明後日」の装画をコピーしたものがあり（図13）、⑦は③の後に作られていたことになる。
- ・⑦に挟込み下絵（コピー）の中に、②の装画下絵（墨）をコピーしたものが3点みられ（図14）、⑦は②の後に作られたことになる。
- ・⑦の下絵（コピー）に⑤の「お船のつなとれば」と、「船のらば里前」に挟込みの装画挿絵（墨）をコピーしたも



②『琉球秀歌』



⑤『琉歌愛誦 三十三首<本冊>』試案

図11



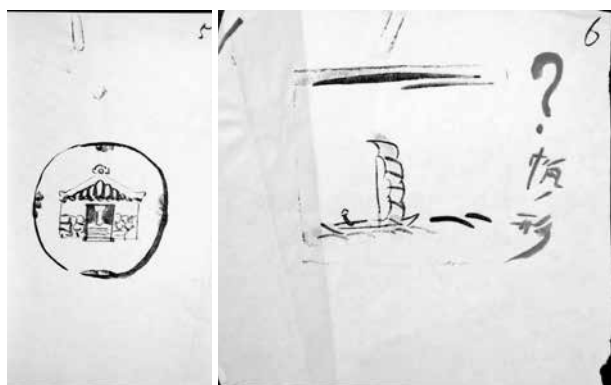
図12 ⑦に挟込みのコピー



図13 ③の装画下絵



図14 ②装画下絵（墨書）

「お船のつなとれば」
装画

「船のらば里前」装画

図15 ⑤の装画挟込み下絵（墨書）

のがみられ（図15）、⑦は⑤の後に作られたことになる。

その他、②「なくなよやあさゝ」の装画下絵（彩色）と③の装画下絵（墨）、②にある子供（彩色）が、②⑦の下絵（墨）に、③「今日のほこらしや」の装画下絵（彩色）が②の下絵（墨）に近似する。これらからも装画下絵制作にあたって、②③⑤⑦には密接な関連性が見られる。

装画下絵制作順は②③（1970年頃）→⑤（1979年10月以降）→⑦（1981年1月以降）→①の順となる。

4 関連資料の比較検討

ここでは、関連資料の中で芹沢作下絵の最終形と考えられる①と、⑤と⑨にある外村の指示書きから、装画についての芹沢と外村との意見交換を中心に検証する（p.84～86の別表参照）。

一石なごの石の、二今日のほこらしや、三だんじょ嘉例吉や、十二なくなよやあさゝ、十八手巾もちやぎりば、十九花染の袖も、三十一おどらだなおれば、三十二与論てる島や の8首の装画については外村の指示書きと異なり、芹沢が考えた絵が使われている。

しかし、それ以外の25首については外村の指示書きに従った装画を入れていて、編者・外村の案をできる限り採用しようとした芹沢の想いが伝わる。

⑤の表紙に、芹沢は朱字で「著者ノ指定サレタ歌ト絵ノ組み合ハセヲ此帖ニ試ミタリ」「此度の校正済ミ次第直ちに型に着手（筆者傍線）」と書く。

1980年6月7日に外村から芹沢宛てに届いた速達のハガキには「琉歌の字彫 画彫 御進捗の様子 今村氏から知らせをいたゞき 喜びにたえません 唯々美しいものをまつ心躍りのこのごろです」とある。吾八書房の今村秀太郎は⑤の表紙にあった「直ちに型に着手」との芹沢の言葉を外村に知らせたのだろうか。

しかし、25首を外村案の装画とし、8首をみずからの案で①の下絵本を作ったのは1980年秋以降のことと考えられる。

下絵本①では一、二の琉歌の型彫りは終了したものの三はまだ彫りかけの状態、他は④の琉歌下絵をコピーして貼り付けている。残る資料の中では、琉歌と装画の組み合わせ下絵としてはより完成版に近い状態の資料と考えられる。この下絵から琉歌の型彫り、装画の型彫りが出来上がり、その後、出雲斐伊川紙に型付けされ、色差しされれば、〈本冊〉は完成したはずである。

別表

＜別冊＞琉歌目次	⑨の外村指示書き	⑤＜本冊＞試案	⑤の外村指示書き	①＜本冊＞下絵本
			造本 表紙 見返し 扉 目次 カット 右 全部 よろしくおねがい申します 外村は編者にして下さるよう 願います	
一 石なごの 石の	小石 大岩 王宮（曾て（沖縄風 物）にお出しになっ た首里城風景			
二 今日のほ こらしや	花の蕾			
三 だんじょ 嘉例古や	順風の祈願の社寺、 御嶽詣で			
四 いかり引 きのせて	むかし沖縄99 順風の大船		解説に書いた「マーランシ」 という大船です。帆の形を 本帆＝主帆 矢帆＝助帆 可然 お考え下されて一艘、如何 でしょう	
五 お船のつ なとれば				
六 船のらば 里前			この歌の船は、もう汽船に なってからかも知れません 夫が船底の船室に入っ てしまわないで、甲板に上っ て手巾を振ってくれという 解釈が適当で前にえらんだ 帆船はとりけします。「甲 板上の人」が「汽船の出港」 はいかゞでしょう。（朱字 で）前後船つゞきですから	
七 三重城に のぼて			「走船」の一目しか見え ない姿 えらんだ御作品集の 右端一艘などいかゞでしょ う 又は、六を船になされたら これは、三重城台場に上 がって見送る女はいかゞで しょう	
八 恩納岳あ がた	恩納岳 シナの冊封使が「数 峰天遠」と形容した		作品集などに山のよいのが 沢山あって恩納岳にあてゝ いただきたいと思いました 「数峰連夫」と「冊封安使」 が形容した 恩納岳です が、樹木豊かに目前に迫る 山容を示していた ぞいたら 幸です	
九 波のこえ もとまれ	万坐毛の断崖 波・風		雲と水の激しい動きをお示 し下さい 文字ぬきです	
十 明日から のあさて	大雨			

＜別冊＞琉歌目次	⑨の外村指示書き	⑤＜本冊＞試案	⑤の外村指示書き	①＜本冊＞下絵本
十一 うらむ 比謝橋や	むかし沖縄193 ○しやもこの写真の 橋を渡った 戦前迄在り		御作品中に橋は少なく、比謝橋に合うのがなくて、「作品集—23」をえらびましたが、「むかし沖縄」(琉球新報社)の153頁に戦前の(我々も渡った)写真が出ているのを御参考下さってはいかゞでしょうか	
十二 なくな よやあさゝ	「孤島苦」の 沖縄の島山		「なくなよやあさゝ」の予言的な世界相を象徴するのにこの装画をえらぶ外なかったのです	
十三 瓦屋つ ちのぼて	貴帖「沖縄」1970「下」 の十四折ウラ器と山		瓦屋(窯場)の向こうの山の線が頂を示すものと考えました	
十四 伊野波 の石くびれ	山中の石ころ坂道		里を離れて 石くびりの坂道にかゝる景色を考えました	
十五 比謝橋 の潮や	前出十一の比謝橋の下 水流 貴「板絵控」の十五折の水の字「手控帖」の十七折の水の字			
十六 あけよ 天川原や	若者の毛遊び 西におちる天の川		天の川が西天に横たわっていた眺めは、御作品に適當なのがないので、夜をまつ村人の生活を示して八と考えました	
十七 七葉あ したばこ				
十八 手巾も ちゃぎりば			畑で働く女人の姿をえらびました	
十九 花染の 袖も	更衣の時の衣二つ 工芸百号56頁123頁		衣桁にかけた衣装でも 脱ぎかけたまゝのものでも御考量ねがいます	
二十 袖やき ぬぎぬの	衣			
二十一 かにくるしゃ あるえ			別れる時の「かにくるしさ」を抽象的にと考えました	
二十二 いった門にま ちゆめ	四つ辻		えらびましたのは 女の家 の門の辺りの風情としてで すが歌は四つ辻も指してお ります 御考量ねがいます	

＜別冊＞琉歌目次	⑨の外村指示書き	⑤＜本冊＞試案	⑤の外村指示書き	①＜本冊＞下絵本
二十三 風回もにまてば	草原			
二十四 恩納岳見れば	雲のかゝる山	 	山に白雲がかゝっているようにねがいます	 
二十五 北京お主日や	北斗七星		この歌には「北斗七星」が適切と思います。御考量ねがいます	 
二十六 荒れゝば立ちゆり	塩焼く煙		御作を塩屋のけむりと見て、えらびました 愚見御採用ねがいます	 
二十七 月の照きよらさ	月と露の玉	 	明かな月光の下山川草木をねがいます	 
二十八 あの伊集の花や	山野の喬木 葉は小さい	 	解説に書きましたように喬木で大きいのですが花は心を惹きます 今村氏によりし押花ごらんねがいます	 
二十九 真謝原のいもや	野の中洗い堀	 	女人の姿が少ないので この御作をえらびました あかんみ（赤嶺）の小堀の野趣とどちらがよろしいでしょうか	 
三十 とうばら石やじ	貴「板絵控」七折目 穂すゝき三株	 	文字なし 三本のすゝきで如何でしょう	 
三十一 おどらだなおれば	踊る人々	 		 
三十二 与論てる島や	与論島の形 南北七キロ弱 北緯27	 		 
三十三 多幸山の山しし	貴「板絵控」二六折 「手控帖」の十八折 の山の中の猪ども	 	山の中の山ししをお示しねがいます	 

おわりに

1993年10月に吾八書房が発行した『コレクション199号』に芹沢の弟子・岡村吉右衛門は「琉歌愛誦 添書」と題する文章を寄稿している。吾八書房の今村から1980年7月刊行の『琉歌愛誦 三十三首＜別冊解説＞』が送付され、そこに「芹沢氏の感情を損ね、＜本冊＞の刊行許可が下りないまま10数年たってしまった」「戦前、渡琉の一員である貴方に、両氏の感情の綻れを解す目的の一文を添えて戦前の雰囲気を感じ、外村氏の解説を理解させるものにしてほしい」とあったという。岡村は、芹沢や外村とともに訪れた1939年の3ヶ月間の思い出を記し、二人の慰めにと、『琉歌愛誦 三十三首』には取り上げられなかった「とばるま節」で文章を締めくくった⁷。沖縄列島最西端の那国島の「とばるま節」は沖縄を愛する者の心にいつもある望郷の歌だという。

しかし、＜本冊＞未刊行の理由としてあげられた今村の言葉「芹沢の感情を損ねた」「両氏の感情の綻れ」は、少なくとも手紙や残された資料から感じられない。

外村は1979年から東京・蒲田の芹沢宅を訪問したり、封書で琉歌原稿や、指示書きを入れた試案を芹沢とやり取りするなど、＜本冊＞と＜別冊付録＞同時刊行に向けて積極的な動きを見せている。たとえば1979年10月には琉歌原稿を芹沢に送り、そこには、「この歌にはこのような装画はどうだろうか」というように鉛筆書き込みをして考えを伝えている。さらに⑤は準備段階での二人の協力の痕跡と、＜本冊＞刊行への強い意欲が示された貴重な資料である。さらに＜別冊付録＞出版後も、全集第8巻刊行準備中の1980年秋以降も＜本冊＞刊行をあきらめず、芹沢にコンタクトをとり、努力したことが⑥や⑦からうかがえる。

芹沢宛ての外村の手紙に、封筒は欠けているため年は不明だが2月24日付けのものが残っている。『琉歌愛誦 三十三首』に関わる音信の中では最終時期のものと思われる、「先日参上の際、近来になく御気色よかったことを喜び」、「『琉歌愛誦』について大変苦慮を煩したこと惭愧の念にたえません。叩頭しておわび申します 何卒ご寛恕下さるよう（筆者傍線）」と書いている。刊行を半ばあきらめたようなお詫びのことばである。

一方、1979年～81年の芹沢の状況をみると1979年4月には千葉県立美術館で「芹沢銈介—その創造のすべて—」展開催、6月にはサントリー美術館で「芹沢銈介の蒐集」展、同月23日からは米国・カリフォルニア州サンディエゴで「芹沢銈介展」が開かれて渡米して展示に立ち合っている。そ

の間にも、1979年5月～1980年10月に天心社刊行会から「型絵染仏画5枚組」が頒布され、同年7月には、1970年の作者だよりに「沖縄秀歌」とともに「このところ滞っています」と書いていた型絵本『妙好人因幡の源左』が、10年がかりで刊行された⁸。1980年8月には『芹沢銈介全集』全31巻の刊行が始まり、「親鸞聖人坐像」と「親鸞聖人立像」もこの時期に作られた。1981年6月には静岡市立芹沢銈介美術館が開館して、芹沢の陣頭指揮のもと開館記念展が開催され、その年11月には天心社から最後の型絵染大作となる釈迦十大弟子像制作の依頼があり、1982年2月頃から本格的に制作が開始されている⁹。

＜本冊＞の下絵本①までは制作したものの、仕事に徹底を期す芹沢にしてみれば、すぐに次の段階の型絵染に進めるような納得できる形までに至っておらず、まだまだ検討の余地があったのだろう。さらに優先したい仕事も重なっていた時期でもあった。

東京新聞（夕刊）（1980年8月）に1980年の全集刊行開始についてのインタビュー記事が¹⁰掲載された。この5月で85歳になったが、「去年頃から疲れやすくなりましてね。糖尿病なんです。それで体力的に型絵染めは無理なんで、この辺で区切りをつけようとして全集出版に踏み切ったんです。まあ、これからは型絵染めを離れたデザインの世界で羽根をのばしたいですね」と語っている。

外村が上記のようなお詫びの手紙を書いたのは、「型絵染は無理」との健康上のことも考えず、しかも芹沢流の仕事待てずに催促めいたことを重ねて苦慮させたことへの反省だったのだろうか。

「静かに沈潜して誠実無比の仕事を崩さない」¹¹とされる芹沢だから、もう少し時を待ってくれたら型絵染によるユニークな＜本冊＞は完成したのではないだろうか。①の下絵本『琉歌愛誦』の存在はそのことを物語っている。

読売新聞社『芹沢図録』の外村の文章「芹沢銈介との交友」¹²に、「60年に近い交友の中でかわされた音信が400通近くあり、絵入りのものが三割に及ぶ」とある。それらの中に、もしかしたら出版に至らなかった芹沢の想いを記したものがあるのかもしれない。

註

- 1) 岡山県民藝協会は2014年6月13日に外村吉之介編・解説の『琉歌愛誦三十三首』＜別冊付録＞を復刻して、『再版琉歌愛誦三十三首』（紙・印刷・製本 備中和紙 丹下直樹）を発行し、第68回日本民藝協会全国大会倉敷大会で参加者に記念品として配布した。

- 2) 3 / 25 ~ 3 / 28 「日本民藝協会同人琉球日記」『月刊民藝第1巻2号』pp.39 ~ 41 1939年5月 日本民藝協会
 - 3 / 29 ~ 4 / 13 「日本民藝協会同人琉球日記第二回」『月刊民藝第1巻3号』pp.32 ~ 37 1939年6月 日本民藝協会
 - 4 / 14 ~ 4 / 16 「日本民藝協会同人琉球日記 第三回」『月刊民藝第1巻4号』pp.32 ~ 35 1939年7月 日本民藝協会
 - 4 / 17 ~ 4 / 30 「日本民藝協会同人琉球日記 第四回」『月刊民藝第1巻5号』pp.50 ~ 55 1939年8月 日本民藝協会
 - 5 / 1 ~ 5 / 15 「日本民藝協会同人琉球日記 第五回」『月刊民藝第1巻6号』pp.55 ~ 59 1939年9月 日本民藝協会
 - 5 / 16 ~ 5 / 24 「日本民藝協会同人琉球日記第六回」『月刊民藝第1巻7号』pp.44 ~ 46 1939年10月 日本民藝協会
 - 5 / 25 ~ 6 / 24 「日本民藝協会同人琉球日記 第七回」『月刊民藝第1巻8号』pp.84 ~ 89 1939年11月 日本民藝協会
 - 6 / 25 ~ 8 / 4 「日本民藝協会同人琉球日記 第八回 先島・台湾紀行」『月刊民藝第1巻9号』pp.37 ~ 45 1939年12月 日本民藝協会
- 外村吉之介は5月24日午前10時に出帆、芹沢銈介は5月30日の午後3時に出帆した。外村が琉球日記を書いたのは第六回までで、第七回、八回は田中俊雄が担当したと思われる。
- 3) 岡村吉右衛門「琉歌愛唱 添書」『コレクション199号』pp.5 ~ 6 1993年10月 吾八書房
 - 4) 鈴木訓治「再び琉球へ」12 / 31 ~ 1 / 3『月刊民藝第2巻2号』pp.40 ~ 42 1940年2月 日本民藝協会
 - 鈴木訓治「琉球観光記」1 / 3 ~ 1 / 12『月刊民藝第2巻3号』pp.28 ~ 31 1940年3月 日本民藝協会
 - 5) 外村吉之介「琉球の民歌」『工藝100号』p.80に「喜久山添采氏にご教示をえたことは重ね重ね感謝である。」と記す。
 - 6) 『芹沢銈介全集第8巻』pp.162 ~ 165 1981年 中央公論社
 - 7) 岡村吉右衛門「琉歌愛唱 添書」『コレクション199号』pp.3 ~ 8 1993年10月 吾八書房
 - 8) 門脇佳代子「芹沢銈介作 絵本『妙好人因幡の源左』」『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 年報5』p.96 2014年
 - 9) 門脇佳代子「芹沢銈介作『釈迦十大弟子尊像』一型絵染への挑戦」『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 年報6』p.64 2015年
 - 10) 東京新聞(夕刊)「全集31巻の刊行がはじまる 芹沢銈介氏」1980年8月23日
 - 11) 壽岳文章「因縁重々-芹沢兄と私と-」壽岳文章『柳 宗悦と共に』p.307 集英社
- さらに、壽岳は「芹沢さんの世界」同上 p.309に『絵本どんきぼうて』出版の時を回想して、約束の期限がきても仕事が進行しなかったことを記し、「それ以来、芹沢に仕事を頼む時には約束の3倍の時間はかかると覚悟をきめている」と語る。
- 12) 外村吉之介「芹沢銈介との交流」『型絵染の巨匠 芹沢銈介展図録』読売新聞社 1985年 ページ表記なし

付記

新出資料の使用と芹沢銈介作品の掲載にあたり芹沢恵子様の格別のご配慮と使用許可をいただき、深く感謝申し上げます。

新出資料に含まれる外村吉之介関連資料の使用と掲載については、ご遺族の外村民彦様、飯塚恵理様のご配慮と掲載許可をいただきました。心よりお礼申し上げます。

英文要旨については東北福祉大学のKen Schmidt教授にご協力をいただきました。感謝申し上げます。

参考) 琉歌三十三首の全文

- 一、石なごの石の 大瀬なるまでも おかけばせめしうれ 我御主がなし
- 二、今日のほこらしやや 何にぎやなたてる つばておる花の つゆきやたごと
- 三、だんじよ嘉例吉や えらでさしみしえる お船のつなとれば 風やまとも
- 四、いかり引きのせて 本帆矢帆もたち いまの舵うたへば 風もまとも
- 五、お船のつなとれば よしぢよよしまれめ いもちもれ里前 朝夕拝ま
- 六、船のらば里前 船底にのゆな ぼんの上にのぼて 手巾まにげ
- 七、三重城にのぼて 手巾もちゃげれば 走船のならひや 一目で見ゆる
- 八、恩納岳あがた 里が生れ島 もりも押しのけて こがたなさな
- 九、波のこえもとまれ 風のこえもとまれ 首里天がなし みおんき拝ま
- 十、明日からのあさて 里が番のぼり 谷茶こす雨の ふらなやすが
- 十一、うらむ比謝橋や なさけないぬ人の わぬわたさともて かけておきやら
- 十二、なくなよやあさゝ 食わんでやあらぬ 肝かなさあてど 抱きや見ちやる
- 十三、瓦屋つちのぼて 真南向かて見れば 島の浦ど見ゆる 里や見らぬ
- 十四、伊野波の石こびれ 無蔵つれてのぼる にゃへも石こびれ とさはあらな
- 十五、比謝橋の潮や 水行逢てもどる わみや里いきやて 今どもどる
- 十六、あけよ天川原や 島よこになたさ できやよ立もどら 明日あそぼ
- 十七、七葉あしたばこ かしらこにしちゆて 里や原となり 行逢はだいのもの
- 十八、手巾もちゃぎりば よその目のしげさ かしらとりなづけ 手しやい招げ
- 十九、花染の袖も ぬぎかえて今日や 別れゆる春の なごり立ちゆさ
- 二十、袖やきぬぎぬの 恋し色染めれ 裾にぬきとめれ しほらし匂
- 二十一、かにくるしゃあるえ あわれ思無蔵が わかれ路のそでに すがて泣けば
- 二十二、いった門にまちゆめ 風回到まちゆめ なれや風回や ましやあらね
- 二十三、風回到まてば 風のものゆこと ならば坂下りて 中の毛小に
- 二十四、恩納岳見れば 白雲のかゝる 恋しさやつめて 見ばしやばかり
- 二十五、北京お主日や ずまにそなれよが 七つ星下の 北京ちよしま
- 二十六、荒れゝばも立ちゆり 凪れゝばも立ちゆり 立ちまさりまさり塩屋のけぶり
- 二十七、月の照りきよらさ 糸とまいれわらべ つゆの玉ひろて 貫きやりあすば
- 二十八、あの伊集の花や あがきよらさ咲きゆり わぬも伊集やとて 真白咲かな
- 二十九、真謝原のいもや 一本から三ばき あかんみの小堀 あらいどころ
- 三十、とうばら石やじ じきぶす三ぶす 未が花咲きや みだれなゆり
- 三十一、おどらだなおれは 島や山なりゆり でわきやほりたてゝ おどてどよも
- 三十二、与論てる島や いねくさしやしが なべのそこなかに ごくやたまる
- 三十三、多幸山の山しし おどろくな山しし 喜名の高平安座 山田もどり